

いわき地方の古生層から古第三紀層を訪ねて：
静岡県地学会・平地学同好会合同巡検報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-06-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 仁美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025301

いわき地方の古生層から古第三紀層を訪ねて

～静岡県地学会・平地学同好会合同巡検報告～

松 本 仁 美*

平成6年8月16日～17日にかけて、静岡県地学会・平地学同好会の合同巡検会が、福島県いわき市を中心として開催された。この巡検会は、昨年8月、平地学同好会会員有志が本県の糸魚川・静岡構造線の露頭や県地震防災センター等を合同巡検されたのがきっかけで、本年度は本会会員有志がいわき市に出向き、いわき地方の古生層から古第三紀層を訪ね、化石採集や鉱物採集をしようというものである。今まで単独の活動をしていた本地学会にとって、他県の地学同好会との合同巡検は、一つの転機ともなるべき新しい活動であろう。

酷暑もようやく峠にさしかかった頃に行われた巡検会は、好天にも恵まれ、柳澤一郎平地学同好会会長の案内のもと、数々のおみやげを手に入れることができたいへん有意義であった。ひとえに、柳澤会長はじめ、平地学会の会員の方々の献身的なご援助の賜物であり、ここに深く感謝の意を表する次第である。

以下に本巡検会の簡単な内容を述べる（第1図に本巡検会のコースを示す）。

8月16日(火)

JR平駅での挨拶も早々に、平地学同好会の用意してくださったマイクロバスに乗り、国道6号線を北上、波立海岸、殿上山の海食崖を車中より眺めながら、アンモナイトセンターへと向かう。

白亜紀双葉層群と古第三紀白水層群との不整合

アンモナイトセンターへの途中、入間沢の^{オビサガワ}大久川にかかる橋のたもとに、白亜紀双葉層群球山層の砂岩層と古第三紀漸新世白水層群岩城層の基底礫岩が接する不整合面が見られた。短時間の下車であったので、河床まで降りて不整合面を直接観察する事は出来なかったが、橋上からもはっきりと確認する事が出来た。

この地点より200～300m程上流であろうか、板木沢の大久川左岸から、いわき市の名を高めるきっかけになった首長竜（フタバズキリュウ）が発見された。田んぼの中を流れる何の変哲もない小河川の露頭から日本の恐竜発掘の緒をつくったフタバズキリュウが発見されたのは驚きであった。フタバズキリュウが発掘されたのは、1970年であったが、発見者の鈴木直氏は、その後、入間沢から数体の首長竜を発見し、いわき市教育委員会の発掘調査（1981・1982年）では、首長竜、モササウルス、ノコギリエイ等の化石が発掘されているそうである。まさにこの地一帯が化石の宝庫である事をうかがわせる。

アンモナイトセンター

アンモナイトセンターに着き、改めて、平地学同好会と静岡県地学会の会員紹介が行われた。両会長の挨拶の後、参加者一人一人の自己紹介があった。

* 静岡市立南部小学校



第1図 見学コース（国土地理院20万分の1地形図「白河」使用）

見学コース

8月16日(火)

JR平駅前 (12:15) → 波立海岸 → 入間沢 → 板木沢 → アンモナイトセンター (13:00) → 体験発掘 (14:00 迄) → 新八茎鉾山 (14:50) → 高倉山古生層 (16:30) → サンルート (18:00) 泊

8月17日(水)

サンルート (8:30) → 国宝白水阿弥陀堂 (9:00) → ミロク沢 (9:40) → 川平 (10:30) → 石炭化石館 (11:30) → 湯本駅 (14:00) 解散

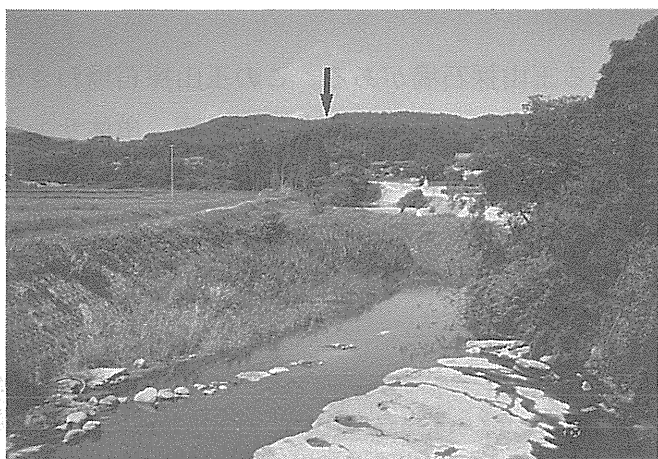


写真1 大久川の橋から板木沢方向を望む
(写真中央に見える矢印の地点
からフタバスズキリュウ発見)



写真2 化石発掘体験ゾーンでの採集の様子
(アンモナイトセンター)

アンモナイトセンターは、双葉層群下位層の足沢層上に立地している。足沢層は、アンモナイトやサメの歯の化石を多産する。このセンターは、大型アンモナイトが同一層準に密集して産出する状況を直接観察することが出来る展示が呼び物となっている。20 m×30 mはあろうと思われる大露頭は圧巻である。戸外には、入館者が化石採集を体験できる露頭があり、本巡検参加者も、説明もそこそこに化石採集に夢中になった。「さすが中生層」といえる固い砂岩に、たがねを立て、イノセラムやサメの歯などの化石を採集することが出来た。

新八茎^{やぐき}鉱山

昭和30年代～40年代にかけて銅鉱・タングステン鉱を盛んに採掘していたが、鉱業の衰退とともに縮小され昭和63年に閉山に至ったようである。古くから我が国の代表的なスカルン銅鉱床として知られていて、当時の栄華を偲ぶ地名もいくつか残っている。現在は、石灰岩の採石を主に行っている。

休日にもかかわらず会社のマイクロバスを用意していただき、鉱山跡を見学した。坑道は入口が閉鎖されていて、坑内の様子を見ることは出来なかったが、入口に立つと、坑道から流れ出る冷気が肌にこちよかった。坑内は約13度の温度で一定しているとの話であった。坑道横の旧事務所は、鉱物のカラミレンガ造りで貴重なものである。現在は、当時の採掘に使った道具類の展示室として利用されている。

坑道跡見学後、ズリ場で鉱物採集をした。八茎鉱山の代表的鉱物の黄銅鉱、磁鉄鉱、磁硫鉄鉱などやザクロ石、灰鉄輝石、緑れん石などのスカルン鉱物を採集する事が出来た。小1時間程の間であったが、思いもかけず多くの鉱物が採集でき、大いに満足した。



写真3 八茎鉱山ズリ場での鉱物採集の様子

高倉山古生層

八莖鉾山の南に、角閃石安山岩～玢岩類を採掘している玉山採石場がある。この玉山採石場わきの沢には、高倉山古生層の黒色頁岩が分布している。この黒色頁岩から、三葉虫、腕足類、単体サンゴなどの化石が報告されている。特に三葉虫の産出地として天然記念物として指定されている。今回は教育委員会の特別の許可を得て、化石を採集することができた。うす暗い木立ちの中で、蚊にさされながらも運よく腕足類の化石を見つけた会員もいた。

8月17日(水)

弥勒沢炭鉱資料館

1855年(安政2年)、片寄平蔵により、弥勒沢で石炭が発見された。その後(1858年)加納作平らにより石炭採掘が行われ、常磐炭田の中心地として石炭産業の隆盛をみた。明治時代から昭和初期頃までの常磐炭田採掘の様子や、当時使用した道具類が炭鉱資料館に展示されている。当時の炭鉱は、会社組織のものもあったが、多くは一山一家形式のものであったようだ。狭く暑い坑内での労働は大変な重労働で、「水風呂に入り、塩をかじりながらの採掘の様子」などを資料館管理人の渡辺さんから聞き、当時の苦労を伺い知る事が出来た。現在では、そのおかげはなく、山々の所々に残されている坑口は閉じられ夏草が茂っている。

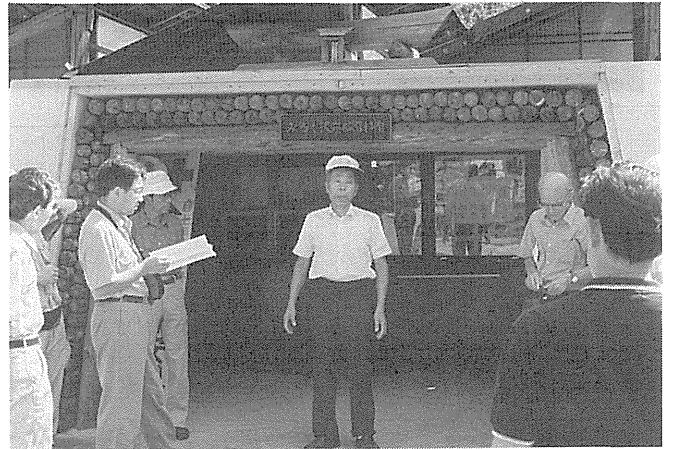


写真4 弥勒沢炭鉱資料館入口で説明を聞く会員
(中央は同資料館管理人の渡辺さん)

白水町川平での化石採集

白水層群の石城層が河床に露出していて、シルト層中からメタセコイヤなどの植物化石を産出する。河床は広く、水量も少なかったので化石採集には好適であった。層理にそってハンマーを入れていくと簡単にシルトががはがれ、数種類の植物化石が見い出せた。所々に薄い炭層を挟み、直径20cm位の炭化した幹が何本か埋まっている所もあった。メタセコイヤ、スギ、ハンノキなどの植物化石を採集する事が出来た。

白水阿弥陀堂

平安時代末(1160年)の建物で国宝に指定されている。方三間単層宝形造り柿葺きで、流れるような屋根の曲線が平安時代の芸術的な建造をしのばせている。奥州平泉金色堂と同時代の様式で、この白水の地名も、平泉の泉の字を分字して名付けたと伝えられている。堂内には、国の重要文化財の本尊阿弥陀如来像とその脇に観音菩薩像、勢



写真5 今回の巡検に参加された会員諸氏
川平での化石採集時に撮影(前列左から
2人目が平地学同好会長柳沢先生、中列
左から4人目が本会会長伊藤先生)

至菩薩像、持国天像、多聞天像がおかれ、いずれも国の重要文化財に指定されている。広い境内の池とその横に立つ阿弥陀堂が美しく、多くの観光客が訪れていた。

いわき石炭・化石館

常磐線湯本駅から約500mの所にある。常磐炭田の石炭採掘の歴史といわき市内で発掘された化石をもとにして、地球の歴史を市民に分かりやすく説明するため、外国を含む諸地域の化石資料を展示している。化石の展示が充実しており学術的にも教育的にもいわき市民の文化の高さを物語っている。

1階の化石展示室には、フタバスズキリュウの全身骨格模型をはじめ、いわき市内で発見された巨大アンモナイト、プロトプテルム、イワキクジラなどがある。海外から産出されたものとしては、体長22mのアメニチサウルス、アルバートサウルス、クリダスラスなど、数体の骨格模型が展示されている。

2階の展示は、常磐炭田の歴史を紹介するもので、長倉炭鉱から産出された約1トンの炭塊もある(展示場所は1F入口)。ユニークな展示は模擬坑道で、坑道には実際の枠がはめられ、古い時代から現代へと採炭の状況をジオラマを利用して再現している。

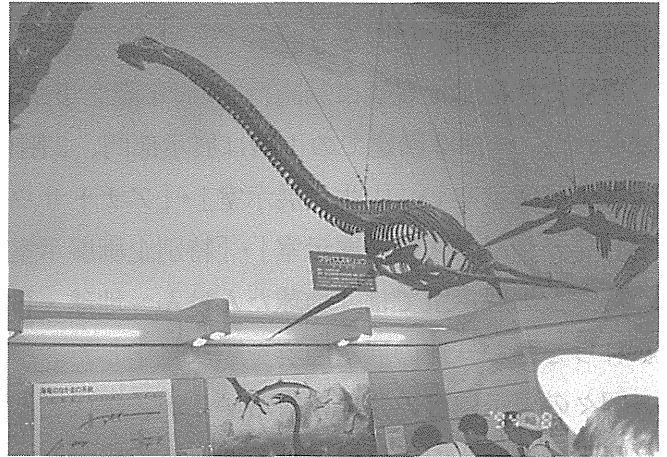


写真6 フタバスズキリュウの骨格模型 (いわき石炭・化石館)

いわき石炭・化石館はいずれの展示もすばらしく、いわき地方という地の利を十分に生かした博物館であった。静岡県には残念ながら公立の自然史系の博物館がない。全国各地の殆どの県が自然史系の博物館を設置している現在、我々の様な団体が声を大にして設置を要望してもよいように思う。会員諸氏の御意見を伺えれば幸いである。

石炭・化石館の見学を最後に今回の巡検は無事終了した。改めて平地学同好会の皆様にお礼申し上げます。また、今後も両会が交流を深め、共に発展していくことを祈念している。